



大地女神・太陽神と王権一  
随想集（3）



小林 道憲

## 大地女神・太陽神と王権——随想 (3) 目次

大地女神—————	1
太陽神と王権—————	5

### 大地女神

マリヤ・ギンブタスの『古ヨーロッパの神々』は、紀元前六千五百年から三千五百年の東南ヨーロッパに出土する新石器時代の女神像の考古学的研究である。これは、インド・ヨーロッパ語族の侵入以前の古ヨーロッパに、大地の豊穡を象徴する女神崇拝の信仰があったことを、広範にそして詳細に実証した名著である。

古ヨーロッパに盛んに出土する胸部や腹部、臀部や大腿部を誇張し、性的部分を強調する女神像は、粘土や大理石、骨などで出来ている。それらは、どれも極端にデフォルメされており、抽象化が著しい。胸の下で腕を折り曲げ立っている女神像もあれば、坐っている女神像もある。それは、何らかの豊穡儀礼とかかわりのある象徴的表現とみてよいであろう。

ヨーロッパの新石器時代、小麦や大麦の栽培など農耕が始まると、妊娠した女性と耕地の肥沃さが結び付けられ、多産な女神像が作られていった。耕地に種を蒔けば、大地の不思議な力によって穀物が育ってくる。この大地の生産力が多産な女神像によって表現されていたのであろう。豊かな身体を備えた女神像は新石器時代特有の観念を表わしている。

植物がそうであるように、大地は、そこからあらゆる生命が生まれ出るとともにそこへと死していき、そして、そこから再生して行く場所である。だからまた、豊穡女神は、生命の付与者として豊穡を約束する女神でもあり同時に、自然の破壊力を象徴する死の女

神でもあった。大地女神は、生きとし生けるものを生み出すとともに、それらを再び呑み込んでいく。

大地女神は、生と死、そして再生を司っている。女神像に強調されている性的部分の三角形は、母なる大地の子宮への入り口であり、地下の冥界への入り口でもある。それは、再生のために死者が回帰して行く尽きることのない生命の根源を視覚化しようとしたものである。そこでは、生と死が分かち難く相補的に一つになっている。大地女神は、生と死と再生、生命の永遠を象徴している。

妊娠した女神の腹の上や臀部などでとぐろを巻いている蛇も、その卓越した活力によって、不死と再生、生命力の源を象徴する。渦巻きや蛇行線や螺旋紋様は、古ヨーロッパ芸術の支配的なモチーフであるが、それは、蛇紋とも共通した大地のダイナミズムを表現する図像である。古ヨーロッパ文明の宗教と神話は、大地女神信仰の上に築かれていた。古ヨーロッパの芸術には、大地を母とするそのようなコスモロジーがあったのである。

わが国の新石器時代つまり縄文時代の土偶や土器にも女神像が多く造形され、これも、大地母神を表わしていたと思われる。ヨーロッパ同様、性的部分を強調し、豊満な腹部をもった女性像が多数作られている。縄文中期になると、出産中の姿を表わした女神像や赤子を抱いて乳を飲ませている女神像も現われる。

例えば、山梨県北杜市の津金御所前遺跡出土の顔面把手付深鉢は、全体として妊娠した女神を表わし、膨れた胴体の中央に赤子の顔がお腹の中から出てこようとしている有様が造形されている。そして、上の口の縁には女神を表わすと思われる顔が付けられ、把手の役割をしている。これは、大地母神が今まさに子を分娩しようとしている姿である。大地の恵みである木の実や穀物や芋類を煮炊きして大地母神に捧げるとともに、それを神々とともに共食する豊穡儀礼が行なわれていたと思われる。これは、そのための祭祀土器だったのであろう。大地の女神は、食物を自分の体から惜しみなく恵んでくれ、自分達を養ってくれる偉大な母神と観念されていたのであろう。

恵まれる食物は、この地母神の生む子と同一視されていたに違いない。縄文時代には、食糧を入れそれを煮炊きする土器そのものが、すでに万物を育む母なる大地の子宮のようなものとしてイメージされていた。大地の豊穡への信仰なくして、このような造形はなかったであろう。

しかし、この土器の把手の役割をしている女神の顔の反対側を見ると、その表情は表側とはまるで違っている。異様に大きい丸い両の目だけが目立ち、左の目は渦巻きのようにも見え、多くの同心円模様が描かれている。これはおそらく、大地女神が同時に死の神でもあることを表現するものであろう。大地の女神は死の女神でもある。死者たちは地下に埋葬され、この大地女神の胎内に帰る。大地女神は、死者たちの行く冥界を支配している女神でもあったのである。

御所前遺跡出土の女神像土器は珍しく全体が復元できるものであったが、縄文時代の土偶や土器は、多くの場合完全な形のままで発見されるものは珍しく、大概破壊された形で出てくる。数多く出土している顔面把手付深鉢も、女神の首だけで見つかるのが通常の姿であった。土偶や土器を壊すことで、地母神を殺害し、その死体から作物を生み出させようとするような豊穡儀礼があったと思われる。かつてイエンゼンが『殺された女神』で明らかにしたように、わが国の縄文時代にも、女神の死体から人間にとって有用な栽培植物が発生したという信仰があったのであろう。女神が作物をその子として生み出すには、女神の犠牲が必要であった。母なる大地の犠牲こそ、豊かな収穫や生命の豊穡を約束してくれる。ここでも、生命の豊穡への信頼が神の死と裏腹になっている。

縄文土器に盛んに造形されている蛇や螺旋紋様も、〈死と再生〉のシンボルであった。地下に冬眠し甦ってくる蛇は、東西を問わず〈死と再生〉の象徴であり、渦巻く生命の永遠を表わすものであった。

大地の女神は、生み出すものであると同時に包み込むものでもある。万物は母なる大地から生まれまたそこへと帰るといった観念があ

ったのであろう。ここでは、生と死、創造と破壊、相対立する二極が一つになっている。そして、それが無限の生成を起こす。そのような大きなコスモロジーなくして、縄文時代の土偶や土器は生み出されなかったと思われる。

このヨーロッパにも日本列島にも共通した新石器時代の地母神信仰は、しかし、さらに旧石器時代に源泉をもっている。約四万年前ごろから始まる後期旧石器時代の代表的遺跡は、ヨーロッパからシベリアにかけての北方ユーラシアに広く分布している。特に、三万年前ごろからは、ヨーロッパの多くの洞窟に食用動物などの壁画が盛んに描かれ、芸術の爆発的な隆盛をみた時代であった。

それと同時に、この洞窟の入り口などからは、石灰岩製や象牙製、土製などの女性小像が各地で出土している。旧石器時代のヴィーナスといわれているものである。ヴィレンドルフのヴィーナス（オーストリア）やレスビュグのヴィーナス（フランス）などがよく知られている。この大きなお腹や巨大な乳房をもった女性小像は、臀部や性的部分が特に強調されているが、顔の造作は欠けている。明らかに妊娠している小像もあるところをみれば、これは夥しい数の子を生み育てる母神を表わすものであろう。おそらく、食用動物の繁殖や食用植物の豊穡を司る女神にまつわる儀礼があったのであろう。旧石器時代にも、超自然的な生産力を象徴する女神崇拝があり、それがやがて地母神に発展していったと思われる。狩猟採集を生業とした旧石器時代にも、大地は、植物や動物や人間など、生きとし生けるものの生みの母であり、生成の原母であるという宗教的な信仰が原初的な形であったと思われる。

この女性小像がしばしばその入り口などに埋められている洞窟も、大地女神の子宮への入り口であり、産道と見なされていたのであろう。洞窟は、その奥深くでは成年儀礼なども行なわれた聖所だったといわれる。だからまた、夥しい数の絵画も、何万年にもわたって描かれ続けたのである。後期旧石器時代のヴィーナス像や洞窟壁画は、旧石器時代の神話的世界を表現している。そこには、素朴なが

ら壮大なコスモロジーが象徴的に表現されている。

大地のもつ生命力を女神像として象徴することは、旧石器、新石器両時代に共通している。特に、人類が植物栽培を習得し農耕が始まると、植物栽培とその収穫は主に女性の仕事になったであろう。その収穫量と食料生産量は、男の仕事であった狩猟よりもはるかに多く安定していたから、次第に女性の力が強くなっていったと思われる。しかも、豊穡多産を祈る儀礼も主に女性が主催したと思われるから、新石器時代に入ると、ますます大地女神の崇拝は盛んになる。

大地は母であり、命を与え養育するものであった。女性のもつ産出力と養育力が、大地の生産力への信仰と結び付いたのである。そして、それは、穀物を豊かに実らせてくれる豊穡女神になっていく。しかし同時に、この豊穡女神は死の女神でもあった。死とは大地の母の懷に帰ることと信じられていたからである。命あるものは死によって母なる大地に帰る。だが、その大地に帰ったものはまた再び大地から生まれ替わってくるという〈死と再生〉の神秘を、大地は人間に教えた。ここでは、生と死は一つであり、生命は永遠に回帰する。

人間は、大地に立ったその時から、われわれはどこから来てどこへ帰るのか、生とは何か、死とは何か、というような問いを問うてきた。そこから宗教も芸術も生まれてきたのだが、先史時代の人々は、それを、大地女神への信仰によっても表現したのである。

## 太陽神と王権

カイロの中心地から南西約十五キロメートル、ギザの砂漠に近づくと、あの有名な三大ピラミッドが見えてくる。古代エジプト・古

王国時代の第四王朝期に造営されたクフ、カフラー、メンカウラー、三王のピラミッドである。ピラミッドは、王の埋葬と祭儀を目的とした葬祭記念建造物であり、王権の正統性と不滅性を象徴する役割を担っていた。ピラミッドはやがて太陽神の祭祀と結びつき、太陽のように、エジプトの王の地位は神聖で永遠なものと考えられるようになっていった。

太陽は、夜明けとともに東の空に生まれ、夕刻とともに西の彼方へと沈むが、翌朝また昇ってくる。これが、人間の死と再生、永遠の生という古代エジプト人の死生観を形作っていった。太陽神ラーは、毎日、太陽の船に乗って天空を駆け巡り、毎夜冥界を巡って再生してくる。死者の魂も、太陽神ラーに導かれて冥界を巡って甦ってくる。

太陽神ラーの信仰が盛んになったのは第五王朝末期からであったが、それとともに、エジプトの王、ファラオは次第にラー自身あるいはラーの息子と考えられるようになり、死んで天に昇り永遠の生を得ると信じられた。そして、それが、この世でのファラオの至上権を根拠づけた。ファラオは、太陽神ラーの化身として、王国の秩序と安寧を保証したのである。

エジプトに小麦や大麦の栽培技術をはじめ多くの技術や文化を伝えたと言われるオシリス神への信仰が盛んになってくるのは、その後である。ファラオは、このオシリス神をも吸収し、太陽神と統合して王権を強化していった。オシリス神はエジプト人に農耕を教え、最後に冥界の王となり死者の審判に当たったと言われるが、ファラオは、このオシリス神の霊威をも身につけ、エジプト人に豊穰を約束したのである。この文化英雄神オシリスと大地女神イシスの子とされるホルスは穀霊神とも考えられるが、ファラオはまた、このホルスの地上での姿だとも考えられた。そして、ファラオの坐る玉座は、ホルスの母イシスの膝ともみなされた。

古代エジプトの王の即位礼は、王を神の化身とみなすこのような神王理念に基づいて行なわれた。ファラオの即位儀礼は、上下エジ



プトの統一を成し遂げたナルメル王の偉業を儀礼的に再現するとともに、ファラオが太陽神ラーともなり、文化神オシリスともなり、その子ホルスともなることによって、天地創造の原初の出来事を象徴的に更新した。ファラオは、創造神が天地創造時に定めた宇宙秩序を不断に維持更新することによって、人間社会の繁栄と平安を確保する聖なる存在であった。ファラオの営む儀礼は、社会の秩序と安定を保証する。王は、神の代行者としてエジプトを統治したのである。

南アメリカ・アンデスのインカ帝国は、十五世紀頃完成した帝国だから、時代的には必ずしも古代帝国とはいえない。しかし、形態的機能的には古代的帝国だったといえるであろう。インカ帝国の王権も太陽崇拝によって根拠づけられていた。インカ王は、自ら太陽の子を名乗り、太陽を父とし、その王権は、王朝の起源に関する神話とそれに基づく儀礼によって正当化されていた。

インカの伝える世界創造と人類創造の神話によれば、創造神ピラコチャは、太陽と月、昼と夜、夏と冬、明けの明星と宵の明星、大地と海、男と女などを生み出し、大洪水の後、新しい人類を出現させた。そして、四人の兄弟と四人の姉妹に、農業や機織など、文明生活の諸技能を人民に伝授することを命じた。彼らは、この創造主の命令に従って地下に潜り、洞窟から飛び出して、金の棒をもって旅をし、その棒が一突きで土中に埋まる場所を見つけ、そこに首都を建設し、太陽神を祀る神殿を建てた。それがインカの首都クスコである。脱落者が一人出たが、彼らはインカ王朝の始祖となった。

だから、インカ帝国でも、太陽神を祀る祭儀が盛んに行なわれた。その中でも、大きな祭礼は、太陽が赤道を横切る時期と南北の回帰線に達する時期に合わせて年四回行なわれた。この四大祭礼はまた、それぞれ、人間の誕生、結婚、父、死を記念する祭りであった。太陽は、日毎海に身を投じて、翌朝アンデスの山から甦ってきた。また、北回帰線に至り、その威力が最も弱くなっても再生してきた。



ちょうどそれと同じように、王やその祖先も太陽と同じ旅をし、その生命は永遠だと考えられていたのである。そのような世界観がなければ、あのインカの壮麗な太陽神殿に埋蔵されていた黄金の偶像なども造られはしなかったであろう。インカの王位継承も、豪華な耳飾りの受け渡しによって象徴的に行なわれた。

インカ王は、太陽神と人間社会を媒介する神聖王として君臨し、社会的安寧をもたらすと信じられていたのである。王こそ、都市や神殿の建設、灌漑用水路の敷設など、国土を創造し、トゥモロコシやジャガイモなどの豊かな実りを約束する世界の中心的存在だったのである。

中米ユカタン半島に成立した古代マヤ文明でも、王権の継承は太陽崇拝と深くつながっていた。たとえば、パレンケの〈碑銘の神殿〉の墳墓は、七世紀頃の王・パカル王朝を称えて造営された記念建造物である。このピラミッド神殿の中心を通過して階段を下り、地下に至ると、そこには王の石棺が置かれ、その蓋を飾っていた彫刻は、パレンケでの王位を巡る世界観を伝えていた。

そこには、天、地、地下を貫く宇宙樹が描かれ、それを伝って、死んだパカル王が沈む太陽とともに地下の死後の世界へと降りていく図が描かれている。パカル王が死の記号を伴った太陽神の首飾りの上に腰掛けるようにして描かれていることから、そのことは分かる。パカル王は今まさに大地の怪物の口に呑み込まれるように降下しているのだが、それは、現世における死と死後に行くべき世界との境界にいる状態なのであろう。宇宙樹の上に止まっている天の鳥が左に頭を向けているのは、この王が夜の闇に向かっていることを表わしている。しかも、この神殿そのものが、冬至や夏至には太陽の光が内部の聖所に当たるように建造され、王の死や新王の誕生に関する宇宙創成的な枠組みを伝えている。

同じパレンケの〈十字の神殿〉では、パカル王の後を継ぐカン・バラムの即位を表わす図像が、神殿の内部に造られた小部屋の奥壁

に描かれている。そこでは、中央の宇宙樹を挟んで、左側に死んだパカル王が小さく描かれ、右側に即位するカン・パラムが大きく描かれ、両者の間で王位継承が行なわれていることが物語られている。宇宙樹とともに描かれた太陽は、夜から昼へ、死から生へと変化する宇宙を象徴し、王権が太陽崇拝によって根拠づけられていたことが伺える。宇宙樹の上に止まっている天の鳥が右へ頭を向けているのは、昼の太陽に向かって王位継承が行なわれているという時間的表記なのであろう。

同じパレンケの〈太陽の神殿〉でも、太陽がジャガーの姿をして夜地下を旅する物語が描かれ、神々と化した王の祖先と結びつけられている。〈葉の十字の神殿〉では、東西南北を表わす四本の別々の幹からなるトウモロコシが描かれ、その実は、穀霊神と思われる若い男の頭に置き換えられ、豊かな生産を祈る儀礼との係わりを表わしている。王の権威は、この聖化された農耕神話とも深く結びつけられていたのであろう。

マヤの宇宙は、宇宙樹によって、天、地、地下の垂直方向の三つの層として表現され、創造的な霊力が天界と冥界を結びつけて地上の繁栄を保証していた。王は、天界と冥界にいる神々と常に交信し、世界創造以来の生命の豊さを約束した。それが王権の聖性と正統性の源泉だと観念されていたのである。

メキシコ高原に成立したアステカ帝国も、形態的には古代的帝国とみてよいと思われるが、これも太陽崇拝によって正当化されていた。アステカ族は北方出身の部族で、十四世紀初頭メキシコ高原に侵入、それまでの諸神殿都市国家を征服統合し、帝国を築き、湖に浮かぶテノチティラン島に首都を築いた。アステカの太陽神ウィツィロポチトリは軍神でもあり、アステカ族の軍事的支配圏拡大を保証し、その正当性根拠となった。

太陽が朝から昼にかけて月や星の闇の勢力に打ち克って登場してくるように、アステカの王も、昼の太陽の力を得て飽くなき勝利に

向かって前進するものと考えられた。昼の太陽は王権のモデルでもあったのである。

現今世界は四つの太陽の時代の後に現われた第五の太陽の時代で、この太陽の運行を持続させるには、周期的に供儀を行なわねばならないと、アステカ人は考えた。そのため、太陽の力の源泉である人間の血と心臓を捧げるために、血腥い人身御供の儀式が盛んに行なわれた。

アステカの太陽神は、また、トルテカやテオティワカンの神ケツァルコアトルをも習合し、自らの支配の正当性を根拠づけた。ケツァルコアトルは羽毛を持った蛇で表わされ、金星の神でもあった。だが、明けの明星も昼の太陽に呑み込まれていくように、アステカは、ケツァルコアトルをも太陽信仰の中に呑み込んでいったのである。ケツァルコアトルは大地の神コアトリクエから生まれ、トウモロコシを生み出した雨の神でもある。こうして、アステカでは、太陽神と大地神と水神が結合され、トウモロコシをはじめ食物の豊穡が請け負われた。

アステカの世界観は、メソ・アメリカ全域に共通する天地を結ぶ垂直軸と、東西南北で仕切られる地上の水平軸の交差するところに展開され、そういう世界観に基づいて、帝国の国家儀礼は行なわれていたのである。

わが国の天皇も、天神地祇を祀る祭祀王であるとともに、日の御子といわれるように、古代では太陽の子と観念された。それは、わが国の王位継承儀礼である大嘗祭の構造にも反映している。大嘗祭は、日本を代表する悠紀国・主基国から収穫された米などを宮中に集め、それを神饌にして神々に供し、その神饌を天皇が神々とともに食すという儀式である。ここでは、天皇は神々を祀る人であり、祭司の役割を果たしている。

大嘗祭は、もともと冬至の祭り（新嘗祭）であった。冬至、月が西の空に傾く頃、太陽は大地に沈み、その霊力は一年中で最も弱く

なる。その最も弱くなった太陽の霊力の復活を祈る儀式が冬至の祭りであった。太陽の力が最も弱まる日は、同時に、そこから再び太陽の力が復活してくる日でもある。しかも、この太陽の霊力は、その太陽の霊力によって育まれる穀霊とも深く繋がり、冬至の夜は、穀物はその霊力を回復する時でもある。最も深い闇の後に夜は明け、再びもの皆息を吹き返す。このとき、宇宙は一旦始源に帰って、そして再生する。大嘗祭は、太陽、穀物、王、この三者の永遠の生命を祈る儀式であり、再生の儀式なのである。そのような古代のわが国の人々の信仰が、この大嘗祭には表現されているとみてよいであろう。

だから、それは、天孫降臨神話の再現ともなる。わが国の天孫降臨神話は、大体次のような話になっている。ようやく平定された葦原の中つ国の統治を任せるのに、高天原のタカミムスビまたはアマテラスは、生まれたての孫ニギノミコトを降すことになった。ニギノミコトは、諸神を従えて、筑紫の日向の高千穂の峯に降臨し、天皇の祖先となった。したがって、代々の天皇は日の御子であるという。

天孫ニギノミコトも、正式の名前はアマツヒコヒコホノニギノミコトであり、稲穂の豊かに熟したありさまを意味していた。ニギノミコトは、もとは幼童の姿で天から降臨する穀霊神であった。天孫降臨神話は、この穀霊降臨神話から形成されて、それがやがて始祖降臨神話に変わり、皇室の由来を説く神話に変化していったものと考えられる。

だからこそ、ここに、大嘗祭との連関を見ることができるのである。大嘗祭は穀霊を祀る祭りであると同時に、皇位継承儀礼でもあるからである。とすれば、大嘗祭は、もとは、新天皇が嬰兒の天孫ニギノミコトそのものに生まれ変わる儀式だったのではないか。太陽神アマテラスの霊、つまり太陽の生命力そのものが天皇の肉体に宿り、天皇が日嗣の御子つまり太陽の子となる儀式が、大嘗祭だったのではないか。そこには、古代以来の太陽の永遠の生命力への信

仰があった。

古代エジプト、インカ、マヤ、アステカ、そして日本など、古代文明と王権が成立したところでは、しばしば太陽崇拝が優越した地位を占めてきた。太陽は、天空の至高存在であり、世界軸の頂点に位置していた。太陽は毎夕西に沈み、冬至で最も弱くなるが、そこからまた再生してくることによって、宇宙の再生をも意味した。こうして、天上と地下の両極端は同じ太陽の両面として、生と死を統一し、永遠の生命のシンボルとなった。太陽神はまた、大地神や水神とも結びつき、植物の生命を育むもの、生命の源とも観念され、穀物の豊かさを約束した。

王を頂点とする人間社会の秩序構造も、この宇宙論的秩序になぞらえられた。王は、太陽神そのものまたは太陽神の子と観念され、その神聖な神または神の子が天上から降り立って王族の始祖となり、王は、その始祖とともに太陽神そのものを祀る最高の司祭ともなっていた。王を太陽神の直系と見るこの神聖王権の考えは、王を地上と天上の媒介者とする考えである。王は、このような宗教的役割を果たすことによって、豊穡の分配、生命の保護、宇宙の更新を主催したのである。

王の死とその子への王権の継承も、このような神話に依拠して行なわれ、太陽の死と再生と結びつけられていた。この儀礼によって、時間的には、われらの世界は一旦宇宙の創成期に戻り、再生してくるものと考えられた。各文明で行なわれた王位継承儀礼は、エリアーデの言うように、神話的な祖型の反復という意味をもっていた。

王は、変動する世界の機軸として世界軸を担う者であった。王の死と即位は、この世界軸の担い手の交代を意味していたから、それは、ある意味で不安定な時間でもあった。だから、継承儀礼によって、早急に時間の秩序を回復する必要があった。新王の即位は、時間の再生であり、世界の更新を意味していたのである。しかも、それが、多くの場合、太陽の死と再生に象徴的に結びつけられていた。

太陽神が偉大な帝国や王の支配圏の象徴として地上に君臨しえたのは、このような王権の神学があったからである。

人間は、天と地と地下をつなぐ世界軸に支えられてはじめて人間である。この地上の人間社会と王の関係も、天と地と地下のつながりの中に位置づけられる。王権が成立し、神殿が造られ、都市が建造されるには、このようなコスモロジーが必要である。文明成立にはコスモロジーがなければならない。何にもなしにあの巨大なピラミッドや神殿が造られたわけではない。